

『ロン・パリ評論』のことども

高 野 実

(一)

同僚の橋本三郎君が1952年らいあちこちに発表してきた文芸評論を、1巻にまとめ“ロン・パリ評論”と銘うつて、今年の5月に出版した。出版にあたつての数カ月は、骨をけずるようにして旧稿の整理をしていた。はためにもたえられないほどの仕事であつた。彼の文芸に関する歴史は、金沢の学校にいた頃からはじまり、かれこれ10年の歳月のあいだいろんな短歌結社にぞくし、いまは樹木社に投稿している。本業の方は学校で理科(正確には生物と化学)を担当している。だからしごく多忙である。とても多忙なしかもあまり健康でない彼が、そして生物家である彼が文芸の評論をこゝろみることは容易なことではない。だてや酔興でできることでないとも云えば、あまりにも彼の肩をもちすぎることになるから前おきはこれぐらいにしよう。

(二)

彼はとにかくがんばりやなのでわたくしなどが“無理をするなよ、”といつたところで、“うん、”と愛想笑いをうかべるぐらいが、彼の最大の従順な表現である。

彼は「雑誌“世界、”を読むようなひとたちによりかゝり、ある程度なれ合いになつた評論を書くより、平凡、”にのせられるような評論を、本質をかえることなく書くことの方が今日重要なのではないでしょうか。」というのである。これは副題ともしている“弱さのなかの強さについて、”という一篇のなかで言う彼のことばである。この一篇とか“かくこうたうこと、”という一篇をよめば、生物専門家である彼が、かように文学についてしらべ書くしごとをやるのはどうしたわけなのか、そしてことのほかがんばりやなのは、どうしたわけなのか、そしてこの書の概観がわかる。

いさゝか長くなるが“弱さのなかの強さについて、”のおわりの数行をぬき書きすることからはじめよう。「今広く国民の統一された力が要求されているとき、互のプラスのエネルギーをぶちあて相殺するおろかしさをさけましょう。短歌の弱さを切りすて、徹底的にたたくのは非常によいことです。しかし強さをひつくるめてたゞくのは止めましょう。短歌によつている多くのひとたちのひそめもつプラスのエネルギー、強さを、私たちは組織化するすよう努力しうではありませんか。そうした努力は、たとえ短歌がほろぶことになつ

ても、その上に立派な国民文学をうちたてる努力と重り合うものであり、今日評論のうけもたねばならない役割をはたすものであります。弱さのなかに強さを、そしてその組織化を、これは今日あらゆる面に適用されるべき原則ではないでしょうか。」弱いひとたちのもつている正しさ、強さ、それをすくいあげるしごとがなされなければならない。そしてこのしごとはたがいたがいの「人間としこの結びつきが弱い間は」(かくこうたうこと)とてもなしとげられないだろう。「床に流した水の先端は、ためらうように、とまどうように見えながら、しかし必ず低い方へ流れて」(かくこうたうこと)いくように、わずかずつでもこのしごとはおしすすめられていかなければならない。

これだけぬき書きしただけでもわかるかと思うが、彼はひとはかわりうるものであることを知つているし、ひとに信頼をよせている。みんながみんなを信頼できる社会は、「ともに集会、結社、言論、信仰その他一切のブルジョワ的自由をまもるためには手をつなぐことができる」(“宗教について、”)ということからつくられていくし、わたくしどもはいまそれをすべきところにたつているという。

(三)

“科学のための科学、”という科学に関する評論を載せている。他はほとんどが短歌を中心とした文学評論であるが、これらのなかに、自然科学に取材したわかりよいそして進歩的なみかたからした事実を、論ずることの例としてあげている。これは文芸にしたしむひとの常識をひきあげるものとおもう。

柏木ますみというひとの、“科学のための科学が、科学発展にあずかつて力があるという立場から、再度私に加えられた批判をおよそ批判したつもり、”(科学のための科学あとがき)でかかれたものである。短篇ではあるが、彼の科学に対する考えが堂々とのべられている。柏木さんのようなまちがつた考えは、科学者のなかにももつているひとがないとはいえないかもしれない。じつさい科学者たちは大衆との交渉がたゞれていなし、科学の方法自体が象牙の塔に入つている。もつとたいせつなことは「科学の方法というものは、一つの固定したものではなく、一つの生長してゆく過程である。それはまた、科学の社会的性格、特に階級的な性格との密接な関係をあばきだすことなしには、考えることができない。」(パネル：歴史における科学)

ということ、学校の科学の講義では教えなかつたということ、だから柏木なみの考えをもつひが多いのはむりもないことである。パナールのいう科学の社会的性格云々について橋本は、紙数の関係から圧縮して書いている。しかしよくわかる。ハンドブック的（というはわたくしにかみつくであろうか）で重宝ささえ感じさせる。彼は科学は技術をなかにだちとして人間に豊かな生活を約束する性質をもっていることは、科学がそれ自体、ヒューマニティをゆたかにたたえもっていることにほかならないという。彼のこうしたことばと、「しかし技術の本質は物を作ることである。技術は物を作ることによつて人間を作る。我々は物を作ることによつて自己を作つてゆくのである。技術は人間形的意義をもっている。……しかも技術は元來社会的なものであり、その人間形成は社会的人間形成でなければならぬ。」（三木清：技術哲学 技術の倫理）ということばとが、かさなりあつてわたくしに教えてくれる。アインシュタインは「科学の目的と意味は何かという問いは異なる時代や異なる種類の人々から全く異なる答をうけるものである」という。いまの時代のいまのひとびとからでべき答が、彼の“科学のための科学”のなかに、「科学のための科学」という考え方は、それが国民の間に拡がることによつて、物の潤沢さをかくすことになるであろうということ、そのことによつて社会のごく一部のひとが大変利益をうけるということ、したがつて科学のための科学

というような考えをまきちらすものは、本人の意志いかんにかかわらず、そういう一部の人たちに奉仕しているのだということがいいたかつたのです。」ということばでもつて答えられている。

(四)

“試歩路について”は労作である。“高校教育とヒューマニズム”は彼の教師としてのほたらきのたまものである。これら一貫して彼のヒューマニズムを知ることができる。

さてここまで書いてきて、ひよつと思ひだしたことがある。先日彼の下宿をたずねたとき、杉浦明平さんから葉書がきていた。明平さんとは、その著“ノリソク騒動記”、“台風十三号始末記”などで有名な評論家である。ルポルタージュ文学の第一人者であるといわれている。この明平さんが過日日文協の支部総会で神戸にやつて来て講演したとき、わたくしにかみつかれたひとはみな有名になつていく、と口惜しがつていた。このことを橋本への明平さんの葉書を見ながら思ひだしたのである。明平さんのはがきではロン・パリ評論に関して、橋本にかみつく気配も見せず、どうも橋本の説に同感するものであるという。明平さんのかいたものとしてはみつともないような結論になつている。これでは橋本はえらくならないのではなからうかと思つたのである。こんなことを思ひだしたら、もうあとを書きつづき勇気がなくなつてしまつた。これでおわる。

— (1956.7.12)

新刊紹介

橋本三郎著

ロン・パリ評論

新文庫版、221ページ、定価130円、送料16円
樹木社刊（東京都世田ヶ谷区世田ヶ谷1の992）

著者は県立星陵高校の生物の先生です。先生は生物教師に似合わず（失礼）過去数年来、文学評論、人生観、生活を詠んだ短歌などに興味をもたれ御自身でもいろいろこの方面のものを書かれ優れた才能を現わして来られました。

本書の各編中もその語彙の豊富さに驚かされ、これが生物教師である同僚の著書かと驚異の眼を以て見返す程です。

新文庫版 221 ページであります。物事の理解や理論の明快さが尙がわれ、一気に読み通せる快著です。ともすればあと廻しになる、社会、文学面の教養の推

進書として御購読をお薦めしたいと存じます。一読、私達の視野が広がった感に打たれるのは、朝日新聞書評欄にて教える者としての上から見下す式の型でなく、教えられる者の民衆と共に歩みを進めようとする批評の新しい立場に立つものと評された所以でしょう。

書物は神戸市元町通りの海文堂、日東館などを始め各書店の店頭に並んでいますから、御覧の上、お買求め願ひ度いと存じます。

なお、地方の方は著者あて御申込み願ひたいと存じます。

（室井 緯）